

二〇二四年度 入学試験問題

経済学部A方式Ⅱ日程・社会学部A方式Ⅱ日程・スポーツ健康学部A方式

二限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。
- 四 問題冊子のページを切り離さないこと。

マークシート解答方法についての注意

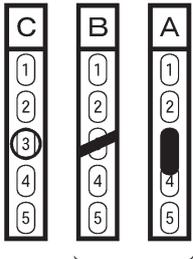
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

翻訳をやっていることの最大の魅惑は、そこで書きつける「私」という単語が自分の私とはまるで無関係なことだ。一人称で書かれた文の翻訳の前提となるこのひどい詐術によって、ほくはフランスの哲学者にも亡命チリ人の生物学者にもアメリカ先住民の詩人にもカリブ海の島の女性の小説家にもなった。

なった、ふりをしてきた。うまく話せない言葉を別の文字に転記し、いろんな肌の色や訛りや髪の毛の縮れや出自の国籍を自分のものとして申告してきた。千度生まれ変わって死をもって償おうとしても償いきれない重罪だとも思えるが、この装われた「私」はあまりによく社会的な慣習としてうけいれられているため、犯罪として罰せられることはない。

それどころか、保護されている！ 翻訳の産業的基盤をなすのは翻訳著作権、それがなければ商売が成立せず、したがって訳書の制作の全体もはじめから試みられなくなるだろう。それに守られている当事者としては翻訳者著作権に文句をいうはずがない。にもかかわらず、特に言葉がすべてである文学の翻訳の場合、ときとしてそれが作品を生かす方向に働かないのも事実だ。

「 I 」ある作家の作品が訳者Aにより翻訳され出版されたなら、それはB、C、D以下可能性としては無限にありえた別の訳者による訳文を、すべて水面下に沈めてしまうから。私的に訳すのは勝手でも、公刊することはできなくなる(すでに翻訳権の切れた古い作品ないしは古典の場合も別でも)。翻訳という仕事にそろそろ二十年近く関わってきて、時々痛感したのが *habent sua fata libelli* という言葉の真実だった。すなわち、「書物はそれ自身の運命をもつ」。どれほど驚嘆すべきすばらしい本でも、それが必ずしも翻訳出版されるとは限らない。幸運にも翻訳出版されたとして、それがその作品にとっての最良の訳者に訳されるとは限らない。もちろん、「最良の訳者」というのは訳書以前に存在するわけではなく、できあがってみなければわからないのが出来映えだけれど、あきらかに「これでは台無しだ」という^①翻訳を書店で手にとって失望することは、しばしばある。

それは別に「この仕事は自分がやりたかった」という職業上の嫉妬心のせいではなく（自分に深い関わりのある著者の作品の場合には、認めよう、そういう一抹の気持ちがしのびこむことがあっても）、日本語という総体が、その作品の移入による砂が崩れるような変貌の機会を、見事に逸してしまったことを惜しむためだ。

そんなときにはかつて読者として自分が（二十歳前後の自分が）強い印象をうけてきた、いくつかのきわめて強く個別化された翻訳を思い浮かべながら、原著をよく知っている場合にはそのパワフルな波動を思い起こしながら、情けないほど弛緩した、色彩にも香気にも欠ける「ただ訳しただけ」という訳書の群れを手にして、ためいきをつく。それでも、多くの場合、その訳書が多くの人の手にわたり、どれほど泥で汚れても消すことのできない内からの光を放ってそれ自身の読者を見いだしてゆくことを、願わずにはいられない。その訳書に、ある絶対的な扉としての価値があると信じられるかぎり。

Ⓐ つねに絶対的に必要なものである外国文学の翻訳は、小さな小さな片隅に追いやられている。それは現代の日本語世界をおおいつくしている。異質な言葉への感受性の衰退、異なる視覚を追求しようという気持ちの衰弱に、対応している。異質な言語とのあいだの軋みに耳をすまそうという意欲の減退に見合っている。文学でも音楽でも、日本の現在の二十歳前後の若者たちと日常的に接触していると思うのだが、かれらに概して「外国」のものに対する関心がひどく薄いのは、ぼくには驚くべき光景だ。（ときどきかれらにいたくなる、「外国」とは抽象的な観念としてですら魅力的なものではないのか？ ポルトガルやベトナムやセネガルやボリビアといった個別の国以前に、ただ霧の中に漠然と浮かぶ「外国」ですら？ それは自分がこの自分から脱出してゆくもつとも確実な契機を与えてくれるものだと思わないか？ いま話している言葉を突然理解不能なものにしたい、別の言葉と話したい、別の空気や光や水を知りたい、別の自分や別の生活を作ってゆきたいと思わないのか？ きみはそれを必要としていないのか？）

Ⓑ ぼくの気持ちはちがった。どれほどありふれた日常的なことを語るためにも、何か新しい光源となるような言葉を求めたかと思つた。気がつかずにいたぼやけた存在に、突然くつきりとした輪郭を与えてくれるような視覚を探したいと思つた。そのためたどりついたひとつの丘が、翻訳だった。翻訳とは、自分の中でかりそめの安定を見せている日本語を危機にさらし、

外気にさらし、^{かんな} 匏をかけ新鮮な地肌を露出させるための機会だと思おうようになった。同時にそれは「私」と自分を呼ぶ私をいつたん宙ぶりにし、別の私の目(やそれと連動する手や口や……)を借りて世界を体験しようとする試みの最初の一步だと思おうようになった。

「歯を磨け！」と歯科医と母がいった。「眼を磨け！」と天才写真家アラキーはいった。「言葉を磨け！」というのはすべての国語のすべての詩人たちが集合的に発する、無言の指令だ。それは強制力をもたないだけに強く、また最高に気前がいい助言でもある。

一人称の語り手がいる翻訳文において「私」と書くときそれが別にこの私でないことは、すぐに納得してもらえらると思う。それでは翻訳ではない、もつとずっとストレートに「自分が書いた」と見なされる文章の場合はどうだろう。

ぼくは翻訳をし、それと平行して短い文章を書いてきた。ジャンルとしてはエッセー、つまり「試み」。手探りの、書き終えるまでは行方のわからない文だ。行方がわからず、出発点もまたその場かぎりのものでしかないとしても、最初に川岸から水面に小舟を漕ぎ出すとき、^② ぼうんと一度船尾を押してくれる見えない精霊の手は存在する。そのきっかけの一撃とは、ぼくにとっては翻訳か旅行か読書のいずれかであり、これ以外にはない。

「Ⅱ」 「そうした文章をいくつか書き発表するうちに、編集者や読者からこんな声を聞くようになった。きみの書くものは、あまりにパーソナルすぎる。きみの書くものには、あまりに「ぼく」が多すぎる！ ぼくは笑った。自分の書く文章がヨーロッパ系言語、特に英語とフランス語からの直訳によって色合いや癖を与えられていることは認めよう。その際、一人称代名詞がときには過度に頻出することも、まあ認めよう。だがそういうかれらはいったい何を基準としているのか。

「Ⅲ」 「ぼく」が頻出するのは、ひとつには自分(普通に社会的に生きている生身の自分)がどんな位置から書いているのかをその文中に書きこんでおきたいという気持ちのせいだ。具体的に、どこにいるのか、そこではどのような天候でどのような気温と湿度でどんな匂いが漂っているのか、いま目になっているのは何で、さっきまで誰とどんな話をしていたのか、できればそうした痕跡を残しておきたい。限定だらけの自分の自覚、社会的な偏見、地理的な限界、知識の乏しさ。見つめれば見つめるだけ

人を沈黙に追いやらすにはいないそうした要素を正直に述べた上で、「Ⅲ」この自分はどのようなように多数の線で構成され、この自分が書いたらどんな線が引けるのか、という一種の仮説を見てもらうためだ。これがひとつのレベル。

③ 同時に、それとはときには矛盾する、もうひとつの別のレベルがある。そのレベルでは一人称は、自分を離れていく。いまいった生身の自分と、「私」という言葉を書きつける自分と、さらには文中でその「私」として動く秘密のエージェントみたいな自分(の影)はひとつに重ならない。これはじつはあらゆる文章でそうなのだが、それなのになぜか、人はそうしたすべての「私」を完全に、強固に、ぴったりと、同一の存在だと信じてしまう！「私」の同一性への信仰はおそろしいかぎりで、日本でもしきみが一人称で小説を書いたとしたら、九九パーセントの読者はその小説の話者である「私」をきみだと思い、そこに書かれているのはきみが現実に体験したこと、事実だと思うのだ。(まさかそんな誤謬びやうからは無縁だ、と自分のことを考えているナイーヴではない読み手だって、賭けてもいいが、ときには「ああ、この部分は作者の実際の体験なんだろうな」などと思いつつ読んでいるはずだ。そうした雑音をすっかり遮断して読めるような純粹な「理論的読み」を行うには、著者名をたんねんに消した上で、意識をアイソレーション・タンクにしずめなければならぬだろう。)

Ⅳ 「ぼくは、そんな「私」の重なりは信じないし、そんな信仰とは別の平面でしか文章を書きたくないし、別の平面で書かれた文章にしか本当に興味を覚えることはない。別の平面というのは端的に言って、一人称の「私」が三人称の「彼／女」と自在に入れ替わることのできる平面、あるいは二人称の「きみ」とも交換可能な平面、人を隔てる人称のフィクションが挫折し、ある根源的な共有の場所(コモン・プレイス)をひらいてくれるような平面だ。言い換えれば、「私」の共有化にむかってひらかれた平面で書かれている、というのが、少なくとも「文学」の最低限の約束なのではないかと思う。

Ⅴ 「文学に作者の「私」はないのか？ 誰が書いてもおなじなのか？」

Ⅵ そういうつもりはない。人称代名詞がさししめす幻影の人にはかかわらず、文が文につながりつむがれていくときの連結の中に、必ず個性化の動きは表れる。その個性化が弱ければ、読者はそれをありふれた、水っぽい味にする、おもしろみのないものとしてうけとるだろう。その個性化が強いとき、文章に署名があるうがなかるうが、人はそこで無数に泡立つように起

きている事件を感じ、語られずにさししめされている水準を感じ、何の理由も根拠もないままに何か意味のよくわからない独自の魂が突然、自分に手渡されたことを感じるだろう。自分がそれにとりつかれたことを感じるだろう。それは見たところ落ち着いていた海面から突然、ひとつの大きな波が立ち上がり、防波堤の上を歩いていた自分にしぶきを浴びせるようなもの。青くすみわたった空に突然、稲妻が走り、ぱらんと降ってきた電ひょうが足元に叩きつけられたようなもの。通りかかった樹木の下で、はっきりと説明することのできないケンムン(奄美諸島の木の精霊)を思いがけなく背負いこんでしまったようなものだろう。

ぼくが書く「ぼく」は必ずしもぼくではない。だがこうして文の連鎖を探ることにおいて、ある紋様形成がおこなわれ、文は未到の地帯を探ろうとする。もはや自分のものかどうかすらわからないそんな紋様、そんな意志において、ぼくはまたはじめて、コモン・プレイスに立った独自の私を発見することになるわけだ。

(管啓次郎『オムニフォン』より。ただし原文の一部を変更した)

注1 アラーキー 写真家、現代芸術家である荒木経惟のぶよしの愛称

注2 アイソレーション・タンク 中に入ること、外部からの感覚的刺激を遮断できる密閉可能な容器(タンク)

問一 筆者はこの文の主題として何について述べているか。最も適切なものをつぎの a～e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 翻訳において筆者が書き記している「私」という表記が織りなす多様性について
- b 一般に出版されている翻訳やエッセーにおける「私」という表記の功罪について
- c 筆者が自らの翻訳やエッセーで書き記している「私」あるいは「ぼく」とはどのようなものかについて
- d 翻訳、エッセーを問わず、「私」あるいは「ぼく」という表記を通じてどのような言葉を磨くかについて
- e エッセーで「私」と書くことに対して、読者が何を理解し、筆者と何を共有するかについて

問二 本文中の空欄「 I 」 「 V 」 に入る最も適切な語をつぎの a～e の中から一つずつ選び、その記号を解答欄にマークせよ。ただし、同じ語は二度入らないものとする。

- a なぜなら
- b ところが
- c それでは
- d でも
- e にもかかわらず

問三 傍線部①「翻訳を書店で手にとって失望することは、しばしばある」とあるが、作者が翻訳に期待していたことを述べている段落はどれか。その書き出しをつぎの a～e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a [A] つねに絶対的に必要
- b [B] ぼくの気持ちはちがった
- c [C] 「ぼく」が頻出するのは
- d [D] 同時に、それとはときには矛盾する
- e [E] そういうつもりはない

問四 傍線部②「ぼうんと一度船尾を押ししてくれる見えない精霊の手」という表現に込められている筆者の思いとして、最も適切なものを、つぎの a ～ e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 異なる目で世界を見たことは、筆者の内面に息づく秘密のエージェントを動かしているという思い。
- b 異なる目で世界を見たことは、ヨーロッパ系の言語を学んできた筆者にとって幸いだったという思い。
- c 異なる目で世界を見たことは、言葉にしがたいが、自分がものを書く上で、後押ししてくれるという思い。
- d 異なる目で世界を見たことは、自分が不安を払拭して自信をもって書く、きっかけになっているという思い。
- e 異なる目で世界を見たことは、神秘的な力によって書き進むべき道を示してもらったのだという思い。

問五 傍線部③「別のレベル」とあるが、その説明として最も適切なものをつぎの a ～ e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 別のレベルでは、「私」は、文がつむがれていく連結の中で、つねに実在の私と矛盾するものである。
- b 別のレベルでは、「私」は、筆者が意図しても、それを実在の私と同一とは思わせることができないものである。
- c 別のレベルでは、「私」は、実在の私が多数の線で構成されているようである。実は根拠のないことを明かすものである。
- d 別のレベルでは、「私」は、書き手が意図しなくても、程度の差こそあれ、個体化と共有化にむかうものである。
- e 別のレベルでは、「私」は、人を隔てる人称のフィクションを挫折させ、人称代名詞の幻影を正当化するものである。

問六 つぎの a ～ e の中から、筆者の主張に合致するものを二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 「外国」に関心を持つことは、異なる視覚を追求しようという気持ちを持つことであり、自分から脱出する契機になる。
- b 「外国」に関心を持つには、抽象的な観念としての「外国」を捨て、本当の空気や水を知ろうと思うことが大切である。
- c どんなに下手な翻訳でも、原書は内からの光を放ち、読者がそれを見いだすのが常であるので、まったく無駄ではない。
- d 筆者にとって翻訳は、罪深い行いだと思われる反面、言葉を磨き、自らのエッセーを書くきっかけの一つになっている。
- e エッセーにおいて「ぼく」が頻出するのは、筆者が自らの限界を乗り越え、自らの立ち位置をはっきりさせたいからである。

〔二〕 つぎの文章は、三島由紀夫が「葉隠とわたし」（一九六七年）で記したものである。これを読んで、後の問いに答えよ。

若い時代の心の伴侶としては、友だちと書物とがある。しかし、友だちは生き身のからだを持っていて、たえず変わっている。ある一時期の感激も時とともにさめ、また別の友だちと、また別の感激が生まれてくる。書物もある意味ではそのようなものである。少年期の一時期に強烈な印象を受け、影響を受けた本も、何年かあとに読んでみると、カンキョウは色あせ、あたかも死骸のように見える場合もないではない。しかし、友だちと書物との一番の差は、友だち自身は変わるが書物自体は変わらないということである。それはたとえ本棚の一隅に見捨てられても、それ自身の生命と思想を埃だらけになって、がんこに守っている。われわれはそれに近づくか、遠ざかるか、自分の態度決定によってその書物を変化させていくことができるだけである。

ここにただ一つ残る本がある。それこそ山本常朝^{注1}の「葉隠」である。戦争中から読みだして、いつも自分の机の周辺に置き、以後二十数年間、折りにふれて、あるページを読んで感銘を新たにした本といえば、おそらく「葉隠」一冊であろう。わけでもない「葉隠」は、それが非常に流行し、かつ世間から必読の書のように強制されていた戦争時代が終わったあとで、かえってわたしの中で光を放ちだした。「葉隠」は本来そのような逆説的な本であるかもしれない。戦争中の「葉隠」は、いわば光の中に置かれた発光体であったが、それがほんとうに光を放つのは闇の中だったのである。

戦後、わたしはまもなく小説家として出発した。当時のわたしの周辺には、新しい時代の、新しい文学の潮流がうず巻いていた。しかし、このいわゆる戦後文学の時代は、わたしに何らの思想的共感も、文学的共感も与えなかった。ただ、わたしと違った思想的経歴を持ち、わたしと違った文学的感受性を持つ人たちの、エネルギーとバイタリティーだけが、嵐のようにわたしのそばをサツカしていった。わたしはもちろん自分の孤独を感じた。そして戦争中から戦後にかけて一貫する自分の最後のよりどころは、何であろうかと考えた。それはマルクスの「資本論」でもなく、また教育勅語でもなかった。その一貫するわ

たしを支える本こそ、わたしのモラルのもととなり、同時にわたしの独自の青春をまるごと是認するものでなければならなかった。わたしのその孤独と反時代的な立場を、両手でしっかりと支えてくれるものでなければならなかった。ア、それは時代にとって禁断の書であるべきであった。「葉隠」はこのあらゆる要請にこたえていた。なぜなら、当時この一冊の本は、戦時中にもはやされたあらゆる本と同様に、大ざっぱに荒縄でひつくられて、ごみたの中へ捨てられた、いとうべき醜悪な、忘れ去らるべき汚らわしい本の一つと考えられていたからである。かくて「葉隠」は時代の闇の中で、初めてそのほんとうの光を放ち出した。

わたしが戦争中から「葉隠」に感じていたものは、かえってその時代になって イ ほんとうの意味を示しはじめた。これは自由を説いた書物なのである。これは情熱を説いた書物なのである。「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」という有名な一句以外に「葉隠」をよく読んだことのない人は、いまだに、この本に忌むしいファナティック「狂信的」なイメージを持っている。しかし、「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」というその一句自体が、この本全体を象徴する逆説なのである。わたしはそこに、^①この本から生きる力を与えられる最大の理由を見いだした。

昭和三十(一九五五)年^②に「小説家の休暇」という書きおろしの評論を発表したとき、わたしは戦後初めて、自分の「葉隠」への愛着を人にもらした。それは次のようである。

〈私は戦争中から読みだして、今も時おり「葉隠」を読む。犬儒^{注2}的な逆説ではなく、行動の知恵と決意がおのずと逆説を生んでゆく、類のないふしぎな道德書。いかにも精気にあふれ、いかにも明朗な、人間的な書物。

封建道德などという既成概念で「葉隠」を読む人には、この爽快さはほとんど味わわれぬ。この本には、一つの社会の確乎たる倫理の下に生きる人たちの自由が溢^{あふ}れている。その倫理も、社会と経済のあらゆる網目をとおして生きている。大前提が一つ与えられ、この前提の下に、すべては精力と情熱の賛美である。エネルギーは善であり、無気力は悪である。そしておどろ

くべき世間智が、いささかのシニズムも含まれずに語られる。ラ・ロシュフコオを読むときの後味の悪さとまさに対蹠的なもの。^{注3}

「葉隠」ほど、道徳的に自尊心を解放した本はあまり見当たらず。精力を是認して、自尊心を否認するというわけには行かない。ここでは行き過ぎということはありえない。高慢ですら「葉隠」は尤も、抽象的な高慢というものは問題にしない、道徳的なのである。

「武勇は、我は日本一と大高慢にてなければならず。」「武士たる者は、武勇に大高慢をなし、死狂ひの覚悟が肝要なり。」「……正しい狂気、というものがあるのだ。

行動人の便宜主義とでも謂ったものが「葉隠」の生活道徳である。流行については、「されば、その時代時代にて、よき様にするが肝要なり。」と事もなく語られる。便宜主義は、異様な洗練に対する倫理的ケツペキさにすぎぬ。^{注4}「そげ者」であらねばならぬ。「古来の勇士は、大方そげ者なり。そげ廻り候気情故、氣力強くして勇氣あり。」

あらゆる芸術作品が時代に対する抵抗から生まれるように、山本常朝のこの聞書も、元禄宝永の華美な風潮を背景に持っていた。(中略)

かくて常朝が、「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」というとき、そこには彼のウトーピッシュ「夢想的」な思想、自由と幸福の理念が語られていた。だから今日のわれわれには、これを理想国の物語と読むことが可能なのである。私にも、もしこの理想国が完全に実現されれば、その住人は、現代のわれわれよりも、はるかに幸福で自由だということが、ほぼ確実に思われる。しかし、確実に存在したのは、常朝の夢想だけである。

「葉隠」の著者は、現代病に対する過激な療法を考えた。人間精神の分裂を予感した彼は、分裂の不幸を警告した。「物が二つになるが悪しきなり。」単純さへの信仰と賛美をよみがえらさねばならぬ。どんな種類の情熱でも、あらゆる本物の情熱に正しさを認めずにはいられぬ彼は、情熱の法則について知悉していた。(中略)^{注5}

人間の陶冶と完成の究極に、自然死を置くか、「葉隠」のように、斬り死や切腹を置くか、私には大した逕庭がないように思

われる。行動家にとって行動が待たれているさまは、人間が「時」に耐えねばならぬという法則を、少しも加減するものではなかった。「二つ二つの場にて、早く死ぬほうに片付くばかりなり。」というとき、この選択には、どんな場合でも自己放棄は最低限度の徳を保障する、という良識が語られているにすぎぬ。そして「二つ二つの場」はなかなかやって来ない。常朝がことさら、「早く死ぬほう」の判断をあげ、その前に当然あるべき、これが「二つ二つの場」という状況判断を隠していることには意味がある。死の判断を生む状況判断は、永い判断の連鎖のうしろに引き、たえざる判断の鍛練は、行動家が耐えねばならぬ永い緊張と集中の時間を暗示している。行動家の世界は、いつも最後の一点を付加することで完成される環を、しじゅう眼前に描いているようなものである。瞬間瞬間、彼は一点をのこしてつながらぬ環を捨て、つぎつぎと別の環に当面する。それに比べると、芸術家や哲学者の世界は、自分のまわりにだんだんひろい同心円を、重ねてゆくような構造をもっている。しかし、さて死がやってきたとき、行動家と芸術家にとって、どちらが完成感が強烈であろうか？ 私は想像するのに、ただ一点を添加することによって瞬時にその世界を完成する死のほうだが、ずっと完成感は強烈ではあるまいか？

行動家の最大の不幸は、そのあやまちのない一点を添加したあと、死ななかつた場合である。那須の与市は、扇的を射たあと永く生きた。「葉隠」の死の教訓は、行為の結果よりも、ただ、行動家の真の幸福を教えたのである。そしてこの幸福を夢想した常朝自身は、四十二歳のとき、鍋島光茂の死に殉じようとして、光茂自身の殉死禁止令によって、死を阻まれた。彼は剃髪出家し、「葉隠聞書」(略して「葉隠」)を心ならずも世にのこして、六十一歳で豊の上で死んだ。

わたしの「葉隠」に対する考えは、今もこれから多くを出していない。むしろこれを書いたときに、はじめて「葉隠」がわたしの中ではつきり固まり、以後は「葉隠」を生き、「葉隠」を実践することに、情熱を注ぎだした、といえるであろう。つまり、ますます深く、「葉隠」にとりつかれることになったのである。それと同時に、「葉隠」が罵っている「芸能」の道に生きているわたしは、自分の行動倫理と芸術との相剋さうこくにしばしば悩まなければならなくなった。文学の中には、どうしても卑怯きせうなものがひそん

でいる、という、ずっと以前から培われていた疑惑がおもてに出てきた。わたしが「文武両道」という考えを強く必要としはじめたのも、もとはといえば「葉隠」のおかげである。文武両道ほど、言いやすく行ないがたい道はないことは、百も承知でいながら、そこにしか、自分の芸術家としての生きるエクスキューズはない、と思い定めるようになったのも、「葉隠」のおかげである。

しかしわたしは、芸術というものは芸術だけの中に **ウ** しては衰え死んでしまう、と考えるものであり、この点でわたしは、世間のいうような芸術至上主義者ではない。芸術はつねに芸術外のものにおびやかされ **コブ** されていなければ、たちまち枯渇してしまうのだ。それというのも、文学などという芸術は、つねに生そのものから材料を得て来ているのであって、その生なるものは母であると同時に仇敵 **キウ** であり、芸術家自身の内にひそむものであると同時に、芸術の永遠の反指定なのである。わたしは「葉隠」に、生の哲学を **エ** 見いだしていたから、その美しく透明なさわやかな世界は、つねに文学の世界の泥沼を、おびやかし挑発するものと感じられた。その姿をはっきり呈示してくれることにおいて、「葉隠」はわたしにとって意味があるのであり、「葉隠」の影響が、芸術家としてのわたしの生き方を異常にむずかしくしてしまったのと同時に、「葉隠」こそは、わたしの文学の母胎であり、永遠の活力の供給源であるともいえるのである。すなわちそのヨウシヤ **ウ** ない鞭 **ムチ** により、叱咤 **シツタ** により、罵倒により、氷のような美しさによって。

(三島由紀夫『葉隠入門』より。ただし原文の一部を変更した)

注1 山本常朝 江戸中期の鍋島藩士。その談話を筆録したものが武士の修養書「葉隠聞書」。

注2 犬儒的 冷笑的なさま。シニカル。

注3 ラ・ロシュフコー ラ・ロシュフコーと表記されることが多い。フランス貴族でモラリスト文学者。

注4 そげ者 かわりもの。変人。奇人。

注5 逕庭 徑庭。二つのものが大きくかけはなれていること。へだたり。

問一 傍線部(あ)～(お)のカタカナ部分にふさわしい漢字を、次の各群の a～h の中からそれぞれ二つずつ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

(あ)	カンキヨウ	a	感	b	観	c	環	d	寒	e	境	f	興	g	協	h	鏡
(い)	サツカ	a	昨	b	作	c	擦	d	咲	e	過	f	家	g	夏	h	禍
(う)	ケツペキ	a	欠	b	潔	c	傑	d	決	e	結	f	壁	g	癖	h	碧
(え)	コブ	a	昆	b	古	c	虎	d	鼓	e	撫	f	侮	g	武	h	舞
(お)	ヨウシヤ	a	様	b	幼	c	容	d	用	e	捨	f	謝	g	赦	h	射

問二 本文中の空欄 に、前後の文脈から入る最も適切な言葉を、つぎの各群の a～e の中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

ア	a	あろうことか	b	のみならず	c	あたかも	d	即座に	e	にもかかわらず
イ	a	のうのうと	b	漠然と	c	ありありと	d	当然のごとく	e	しげしげと
ウ	a	ひっそりと	b	混沌 <small>とん</small> と	c	淡々と	d	のろのろと	e	ぬくぬくと
エ	a	むやみに	b	あやふやに	c	さりげなく	d	つとに	e	わずかに

問三 筆者の若かりし頃の「友だちと書物」に関する考えについて、本文の内容に合致しないものをつぎの a～e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 友だちは、生身の身体をもつていて絶えず成長し変化するので、わたしとの関係性も変化していくものである。
- b 友だちは、少年期の一時に強烈な印象と影響を受けた本のように、いつまでも心の伴侶としてとどまるものである。
- c 書物は、強烈な影響を受けたものでも、わたしが成長するにしたがってその感激は絶えず変化するものである。
- d 書物は、埃まみれになって本棚の一隅に見捨てられても、その中身や内容は決して変わることがない。
- e 書物は、友だちとは異なり変化することはないが、わたしの成長と理解の深まりによって、その印象が変化する。

問四 傍線部①「この本から生きる力を与えられる」とあるが、筆者がその理由として述べる内容に合致するものをつぎの a～e の中から三つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」の一句に、ファナティックな意味づけが付加されていたから。
- b 「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」の一句は、本全体を象徴する逆説であり、自由と情熱を説いた書物であったから。
- c 「葉隠」は、孤独であったわたしの青春を是認し、小説家としてのわたしの立場を支えてくれていたから。
- d 「葉隠」は、戦後は禁断の書となったが、戦時中には光の中に置かれた発光体であったから。
- e 「葉隠」は、戦後の新たな時代の孤独なわたしにとって、闇の中で光を放つ道徳書となりえたから。

問五 傍線部②「小説家の休暇」の中で、「葉隠」について筆者が述べた内容に合致するものをつぎの a ～ e の中から三つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり」という一句には、逆説的に、常朝の夢想的な自由と幸福の理念が含まれている。

b 封建道徳的な概念で「葉隠」を読む人にこそ、自由と情熱にあふれた文章の爽快さを理解することができる。

c 武勇に関しても「我こそは日本一の人物だ」という大高慢の心を持つてもっぱら死に急ぐこと」が肝要だと語られている。

d 武士である以上、武勇に関しては大高慢で、死に物狂いの覚悟で一生懸命に生きることが必要だと語られている。

e 生死二つのうち二者択一を迫られた時、早く死ぬ方を選ぶという判断の鍛錬と行動家の試練が説かれている。

問六 本文における筆者(わたし)の考えに当てはまらないものをつぎの a ～ e の中から二つを選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a わたしにとって「葉隠」は、生の哲学の書であり、生は芸術の永遠のアンチテーゼでもある。

b わたしは「葉隠」のおかげで文武両道を体得し、芸術家として生きる言い訳を必要としなくなった。

c 小説家であるわたしは、文学の中にはどうしても卑怯なものが潜んでいることを自覚してしまった。

d わたしは「葉隠」が見下している芸能の道に生きながら、自らの行動倫理と芸術との対立や矛盾に悩んでいる。

e わたしは芸術至上主義者ではなく、文学はわたしにとって仇敵であると同時に母でもある。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

ヨーロッパの衣服と指輪との関係でも言えることなのだが、衣服が装身具に大きな影響を与えたことは事実である。また、アクセサリーには権威をあらわす側面があり、日本ではその意味において冠帽や衣服が権威を示し、それを律令体制によって徹底させた結果、アクセサリーが駆逐されたということは、当然ありえたことであろう。樋口清之氏も『化粧の文化史』のなかで、大陸文化の影響による唐衣からぎぬの流行が、装身具の消滅の原因であるとしている。

たしかに冠位十二階だけではないにせよ、その後発達した着物が、装身具文化に決定的な影響を与えたことは間違いないことであるとしても、ヨーロッパと比較をするならば、日本人の装身具に対する発想は、ヨーロッパ人と根底において異なるように思える。① というのはヨーロッパでも、日本ほど制度化されていたかどうかは別として、冠や衣服によって権威を示したが、指輪やイヤリングなどの装身具はなくならなかったし、さらに衣服の上から装着するブローチが発達し、装身具は衣服のいかんにかかわらず用いられている事例が認められるからである。

この問題に関連して騎馬民族^②あるいは牧畜民族と、農耕民族の装身具に対する考え方を検討しておく必要がある。その際、移動と定住の視点が重要となる。古代から装身具の文化が発達した地域は、中近東、中央アジア、ヨーロッパなど、おもに遊牧生活をしてきたところが多かった。これは注目し値する事実である。いうまでもなく遊牧民族は、生活上の必要から、家畜をつれて長期にわたって移動することをつねとしていた。

遊牧の際に、かれらは貴重品を身につけておく必要があった。この装身具は、ある面では、かれらの財産の一部でもある。現在でもインド北部や中央アジア地方で、人びとが銀の腕輪をしているのは、そのためである。貴重であるだけに、それはさらに護符や権威のシンボルになりやすい。したがってこのような生活文化が、指輪、腕輪、ネックレスなどを発達させる重要な要因であったといえよう。昨年（一九九八年）、ウクライナ国立歴史宝物博物館が所蔵する黄金の装飾品が日本でも展示されたが、そのなかに騎馬遊牧民が残した金製の動物指輪、スカラベの指輪、その他数多く動物文様の装飾品があったことは注目

に値する。

江上波夫氏は、スキタイの騎馬民族が、「彼ら自身の身のまわりを飾る冠帽、耳飾、頸飾、腕飾、帯金具などの装身具類、彼らの商売道具である弓矢、短剣、鬪斧、甲冑などの武器類、その愛馬の轡、馬面、革金具などの馬具類」などに関心を向けたとする。さらにその理由について、氏は『騎馬民族国家』のなかで「移動生活の必然的な結果として、……小形で、もち運びやすい美術品、たとえば武器・馬具等の附飾品、装身具等に素晴らしい金工工芸品を生み出した」と説明している。騎馬民族は牧畜民族から生まれているので、装身具文化は牧畜民族にもあてはまるであろう。

さらにかつて放浪の民であったユダヤ人たちが、貴金属、寶石、指輪などに大いなる関心を示した事実を指摘しておかねばならない。異邦人として差別されたかれらは、政情不安となればいつ移住を余儀なくされるか分からなかった。かれらにとつては、土地、建物、一国のみで流通しているお金よりも、持ち運びが容易でどこでも換金できる貴金属、寶石、指輪の方が、はるかに重要であった。

さて指輪などの装身具文化は、キリスト教以前の古代オリエント、古代ギリシア・ローマ時代にも大いに隆盛したが、その後、装飾文化に否定的であった初期キリスト教文化とのあいだには、たしかに大きな落差があった。しかし、もともと牧畜民族(南ヨーロッパは農耕民族が混雑している)が多かったヨーロッパでは、根底に装身具文化の基盤があったといえる。したがって初期キリスト教が華美な装身具文化を排除し、質素な信仰生活を旨としたにもかかわらず、日本と違ってヨーロッパでは、装身具文化が連綿と続いてきたと考えられる。しかも後に、キリスト教が中世以降、逆に装身具文化を取り入れ、ロザリオや聖職者の指輪のみならず、教会に豪華な祭壇装飾を施しているのは、たいへん興味深い事実である。

また古代から中世にかけて、ヨーロッパや中近東、エジプトの装身具文化を支えたものに印章指輪がある。大陸に住むかれらは移動や交易の際につねに異民族と接触し、自己防衛をする必要があった。交渉の際には口約束だけでは安心できないので、確実な契約の証拠を求めた。かれらの印章指輪は、封印と契約という生活文化のなから育まれたものであった。これは契約社会であったヨーロッパでは、近代初期にいたるまで重要な役割を演じていた。そもそも結婚指輪の由来は、契約の証拠品である。

一方、日本はまわりを海によって囲まれた島国であり、大陸に比べると異民族と接触する機会はほとんどなかった。人びとはせまい村落共同体のなかで定住し、貧しいながらも信頼にもとづく生活をしてきた。そのなかでは、封印や契約という発想は生まれず、証拠としての印章指輪も結婚指輪も必要とされなかったといえる。これはヨーロッパと大きく異なる点である。そう考えると、^③装身具も生活文化と密接にかかわるものであったことが分かる。

ちなみに原田淑人氏は、生活文化と装身具について、「日本人は神を敬し、つねに手を浄める習慣があるので、指輪は浄手の妨害をなすものであるから、自然これを装着しなかったのであろう」(『古代人の化粧と装身具』)と述べている。たしかに降雨量の少ない大陸と異なり、水をふんだんに使う日本では、とりわけ指輪文化は生活にもなじまないものであった。手を洗ったり、清めたりする習慣があるので、その際、指輪は邪魔であるばかりか、損傷するおそれがあるからだ。

さらに補足すれば、手を使う作業には多くの場合、指輪は邪魔になる。ここにも手先の器用な日本人のあいだに、指輪が普及しなかった一因があったのかもしれない。もともと、指輪、ネックレス、イヤリングなど装身具は、稲作を中心とする農業との関係からいえば、邪魔なものであった。むろん弥生時代やそれ以前の縄文時代の装身具には、^注アニミズムのな護符の側面があるので、いちがいに農耕作業の一面からだけの解釈はできないが、いずれにしても生活習慣のファクターは大きいように思われる。

たしかに日本の装身具における呪詛^そ的信仰は、縄文時代ではとくに必要不可欠なものであったと考えられる。農耕時代に入ると支配と被支配の関係が顕在化し、一般に装身具は、権力をもった支配者が権威を誇示するために装着することが多かったと推定される。むろん、その時代にもアニミズムは存在していたが、生活上、農民たちは装身具をあまり必要としなくなったのではないか。事実、稲作が広まった弥生時代には、貝製の腕輪(貝輪)などは目につくとはいえず、全般的には装身具の出土例は少なくなっている。また、農業には共同作業がつきものであり、この村落共同体の生活のなかで、装身具によって他者との違いを顕在化させることは、結束を乱すという意味からいってもあまり好ましいことではなかった。

その間、古墳時代には大陸の騎馬民族の影響を受け、日本の支配者階級でも^{けんらん}絢爛とした装身具文化が花開き、農民たちにも

耳飾りなどが流行したが、それも一時的なものであった。かれらの文化も結局は本来の農耕文化に同化していった。やがて仏教が伝来すると、呪詛的なアニミズムはしだいに排除され、さらに装身具の権威を誇示する面が冠位十二階や髪形などによって代替された結果、装身具は七世紀ごろ消えてしまった。その後、華美よりもむしろ、わび・さびを尊重する日本の美意識が醸成され、世界にもめずらしい装身具の空白現象が生じたといえよう。ヨーロッパの装身具文化の比較から考えるならば、大陸の牧畜民族に比べ、日本のような独自の生活文化と美意識をもち、集約的な稲作をする農耕民族には装身具の文化を支える基盤が弱かったので、この文化が消えたという仮説が導き出されるのである。ただし、正確にはそれは消えたのではなく、衣服、髪飾りや印籠、根付け、武具の飾りなどに変化していったという方がよいのかもしれない。その際、目立たぬおしゃれが粹とされたのは周知のとおりである。

明治以降、日本は外国文化の移入とともに、洋服や装身具の文化を受け入れたが、当時の時代潮流の典型例は、鹿鳴館時代の風俗画が示している。その後日本では、数ある装身具のなかで、指輪が比較的早く定着したのは、いささか奇妙なことであるといえる。これにはヨーロッパの結婚指輪の習俗が、関係しているものと考えられる。キリスト教に関心をもった上流階級やインテリのあいだでは、教会の結婚式のスタイルは、一種のあこがれの的であった。その一環として用いられた指輪は、かれらのステイタス・シンボルを意味していた。有産階級は日常生活において農耕作業をおこなう必要はなかった。とくに外国女性の白い指にはめられた指輪に、明治の上流階級の人びとは、ヨーロッパ文化との同化を夢見たのかもしれない。

ファッションに関係するネックレスやイヤリングは、日本では指輪より遅れて定着しているので、それだけ結婚指輪をめぐるフォークロアには、人びとを惹きつけるロマンがあったのではなからうか。もはや結婚指輪だけでなく、装飾指輪も日本に定着しているが、何の変哲もないこの小さな世界のなかに、人間が織りなしてきた奥深い歴史が秘められていたのである。

（浜本隆志『指輪の文化史』より。ただし原文の一部を変更した）

問一 傍線部①「日本人の装身具に対する発想は、ヨーロッパ人と根底において異なるように思える」とあるが、筆者がそう考

えたのはなぜか。その理由として最も適切なものをつぎの a～e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a ヨーロッパ人は、衣類だけでなく装身具によっても権威を示してきたが、日本人は七世紀以降は装身具をほとんど用いてこなかったから。

b ヨーロッパ人は、衣服や装身具など装いや装飾によって権威を示そうとしてきたのに対して、日本人は内側からじみ出るものが重要と考え、あまり装いや装飾に関心を持たなかったから。

c 日本人は、冠位十二階をはじめとして、冠帽や衣服によって権威を示す体制が律令体制の確立によって徹底されてきたが、ヨーロッパ人はあまり衣服によって権威を示そうとはしてこなかったから。

d 日本人は、古代から指輪やイヤリングなどの装身具を一度も用いなかったのに対して、ヨーロッパ人はそれらの装身具を常に愛用してきたから。

e 日本人は、古代よりわび・さびなどの独特な美意識を持っていたため、ヨーロッパ人と異なり、華美な装身具に対してほとんど関心を持ってこなかったから。

問二 傍線部②「騎馬民族あるいは牧畜民族と、農耕民族の装身具に対する考え方を検討しておく必要がある」とあるが、その検討によって何が明らかになると筆者は考えているのか。最も適切なものをつぎの a～e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a ヨーロッパ人は主に騎馬民族だったので、移動と定住を繰り返すライフスタイルが一般的で、そのため装身具を重要視することが自然になっていたこと
- b 騎馬民族あるいは牧畜民族はキリスト教を信仰しており、キリスト教はその初期から装身具やきらびやかな装飾を重視する傾向が見られたこと
- c ヨーロッパ人のような牧畜民族や騎馬民族は、動物たちに強い親しみや敬意を抱いていたため、動物をモデルとした装飾が発達しており、そのため装身具も多く用いられたこと
- d 農耕民族である日本人は、定住する民族でもあり、移動の際に財産を持つていくという発想がなく、遊牧民族あるいは牧畜民族に見られるような装身具の発達が見られなかったこと
- e 日本人は古来より農耕民族であり、一度も騎馬民族あるいは牧畜民族の影響を受けたことがなかったため、装身具に対してあまり関心を持ってこなかったこと

問三 傍線部③「装身具も生活文化と密接にかかわるものであった」とあるが、具体的にはどのようなにかかわっていたと考えられるのか。本文の内容と合致しないものをつぎの a～e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 契約を重視する生活文化においては、印章指輪などの装身具文化が発達した。
- b 異民族と接触する機会が少ない文化では、信頼に基づいて物事が進められるため、証としての指輪を必要としなかった。
- c 手先の器用な人が多い社会であれば、精巧な文様を作る文化が発達し、装身具が広がりやすい。
- d 手を洗ったり、清めたりする習慣が多い生活文化では、指輪のような装身具文化は発達しにくい。
- e アニミズム的な信仰を持つ生活文化では、装身具は護符としての側面も持っている。

問四 日本における装身具あるいは装身具文化の変遷について、著者はどのように述べているか。本文の内容と合致するものをつぎの a～e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 縄文時代においては、アニミズム的な護符として装身具が多く用いられていたが、農耕が始まったころには、貝製の腕輪も含めて、装身具の出土例があまり見られなくなっていった。
- b 古墳時代には、さらびやかな装身具文化が支配者階級を中心に花開いていたが、農民たちにまでその影響が届くことがなかったのは、農民の生活文化によるものだろう。
- c 仏教が伝来すると、動物などへの親しみが減ったために、装身具のモチーフは動物ではなくなり、草花や幾何学模様などへと移り変わっていった。
- d 七世紀以降、装身具はほとんど用いられなくなったが、目立たぬおしゃれが粋とされ、日常の小物などの装飾文化は独自の発展を遂げた。
- e 明治期以降、日本で最初に根付いた装身具は、もともと手軽に入手できた装飾指輪であり、ネックレスやイヤリングは遅れて定着した。

問五 装身具が持っている意味として本文中に挙げられているものを、つぎの a～g の中からすべて選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 身を守るための護符
- b 異性を惹きつける魔力
- c 契約の証拠
- d 民族的帰属のしるし
- e 権威を示す道具
- f 趣味の良さを示すもの
- g 持ち運びできる財産

問六 本文の内容に合致するものを、つぎの a～f の中から三つを選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 日本では、律令制度における冠位十二階など、冠帽や衣服によって権威を示す制度が徹底されたことによって、装身具への関心が相対的に弱まった。

b 騎馬民族あるいは牧畜民族において、装身具が持ち運びできる財産として重視され好まれていたのは、主にヨーロッパ地方においていえることであり、他の地域ではあまり見られない。

c ユダヤ人たちは、差別されることが多かったため、いざというときに財産を持ち運びできるように、貴金属や宝石をはじめとして、装身具を好むことが多かった。

d 結婚指輪は、愛し合う二人が生涯の愛を誓うためのものであり、愛情という目に見えないものを形で示すために生み出された、ヨーロッパ独自の文化である。

e 農耕作業は共同で行われることが多いため、自らの地位を明確に示すことは忌避される傾向にあり、そのため日本では衣服によって権威を示すことが好まれなかった。

f 明治期の日本でヨーロッパ文化が流入してきたときに、最初に定着したのは結婚指輪だったが、必ずしも、契約の証というもとの意味で受容されたわけではない。